4日目① 全裸オリエンテーリング開幕!最初の試練はお○ん○ん書道

とっても恥ずかしくて、とっても気持ちいい特別授業という名の学芸会の後。
全裸で帰宅した僕を、じいちゃんが待ち構えていた。
じいちゃんは僕の頭を力強くなでて、ほめてくれた。

「さすが、儂の孫だ。とっても元気でエッチだったぞ」
「うん、ありがとう」

どんなことであれ、ほめられるのは嬉しかった。
そのあと、僕は部屋に閉じこもり、布団を敷いて寝っ転がってオナニーを始めた。
２回射精すると、おちんちんが萎えてきた、
さすがに絶倫薬の効き目もきれたらしい。

そうなると、完全に冷静になって。
僕はなんてことをしてしまったんだろうと考え、頭がおかしくなりそうだった。
舞台の上で観客さん達に見られながらオナニーして、クラスメートと何度もホモセックスして、海藤先生のペニスをフェラして……
ああ……完全に頭のおかしい変態になってしまったんだ……
そんなことを考えながら、疲れ果てた僕はそのまま眠ってしまった。

「天馬、いいかげん起きないと学校に遅刻するぞ」

　じいちゃんに起こされたときは翌朝の７時だった。
　眠ったのが昨日の１６時くらいだったから、とんでもなく長く眠ったことになる。

「こんなに寝ちゃったんだ」

　じいちゃんが笑う。

「はっははは、初めてあの薬を飲んだならそうもなるだろうな」
「じいちゃんもお薬のこと知っていたの？」
「まあな。どうじゃ？　とっても気持ちいい薬だっただろう？」
「そりゃあ、気持ちよかったけど……」

　僕が頭を抱えていると、じいちゃんが心配そうに言った。

「まだ眠いか？　なんなら今日は学校を休むか？」

　うー、本当にそうしようかな。
　でも、僕があの学校に通えるのは木曜日の今日と金曜日の明日だけだ。
　土曜日は当然休校だし、日曜日には東京に戻る。
　あの学校では色々なことがあったけど、それでも貴重な通学日を逃したくない。

「大丈夫、行くよ。どうしょうもなかったら保健室に行くから」
「そうか、なら早く服を着なさい。それとも和尚の孫のように、

これからは元気に全裸で通学するか？」
「あっ」

　言われて僕は自分が全裸のまま寝てしまっていたことに気がつく。

「き、着るよ、服！」

　慌てたせいでちょっと変な日本語になりつつ、僕はタンスからパンツとズボンとシャツを取り出し身につけた。

「ふむ。せっかく孫が元気な姿を見せておったのに残念じゃな」

　じいちゃんは本気で残念そうだ。
　ほんと、じいちゃんも含めこの村の常識は意味が分からない。
　それから朝食を食べて、鞄の中身を整理していると徐々に目が覚めてきた。
　玄関の外からテラの声がした。

「ペガぁ～。起きてるかぁ？」

　どうやら、今日も迎えに来てくれたらしい。
　僕が玄関から出ると、ペガとチビテラが待っていた。
　２人とも当然のように運動靴だけしか身につけていない。
　おちんちん丸出しの全裸だ。

「おはよう、２人とも」
「おう！　ペガ、大丈夫か？」
「何が？」

「あの薬って、初めてだと効きすぎてスゲー眠っちゃったりするからさ」
「うん、まだちょっと眠いけど、大丈夫」
「そっかぁ。まあ、それもしばらくしたら治ると思うぜ」

　ペガは問題なく活動できるらしい。
　一方、チビテラは。

「ボクはまだ眠いよぉ。でも頑張る！　だって今日は特別な日だもん」
「特別な日？」

　昨日の特別授業以上に特別な日なんてあるんだろうか。
　テラが言った。

「そ、ある意味で昨日より気持ちいいぜ」

　昨日より気持ちいい。
……それはつまり……

「昨日よりエッチってこと？」
「ははは、なんだペガ。もっとエッチなことをしたいのか？」
「ち、違うよっ！」

　本当は違わなかった。
　この村で、イケナイこと、ありえないこと、恥ずかしいこと、いっぱい体験したけど。
　どれもこれもとっても気持ちよかった。

あと２日。
あの学校でどんな気持ちいいことが待っているのか。
昨日の特別授業よりももっと気持ちいいなんて想像もできない！
そう考えると、僕は体がほてってきて、楽しみに感じてしまうのだった。

アキちゃんとも合流し、僕らは登校した。
教室に入ると、すでにハカセとぷーやんとミカは登校済みだった。
ハカセとぷーやんは全裸になって、衣服を机の上にたたんでおいている。

僕も席に行くと、背負っていた鞄を下ろしてからシャツを脱いだ。
ハーフパンツとパンツも脱いで、おちんちん丸出しの全裸になった。

ミカが「ふんっ」と鼻を鳴らしてから、吐き捨てるように言った。

「月曜日はあんなに抵抗していたのに、あっさり裸になるのね。男子って本当に変態ばっかり」

ううぅ。
確かに、当たり前のように抵抗なく全裸になっていた。
僕はミカに言い返した。

「しょうがないじゃないか。校則だし……それにまた海藤先生に体罰されろっていうのかよ？」
「本当は裸になりたくてたまらない変態なだけでしょ」
「なんでそんなことが言えるんだよ！」
「だって、あんたのそれ、ちょっとかたくなりかけているじゃない」

ミカが指さしたのは僕のおちんちん。
あわてて見てみると、確かに僕のおちんちんはちょっとだけ勃起しかけていた。

なんで！？
なんで何もしていないのに勃起しちゃってるの！？

「ほらみなさい。おちんちんを見せるのが大好きな変態だからそうなるのよ。大体、裸になるしかなかったとしても、普通はおちんちんだけでも隠しておくわよ」

たしかに！
初日の僕は､少しでもおちんちんを隠すように努力していた。
無駄な努力だったけど。

それなのに。
今はおちんちんを隠そうともしていなかった。
それどころか、おちんちんを勃起させてしまっていた。
本当に、僕は変態になっちゃったのかもしれない。

ちょっぴり落ち込んでいると、テラがミカにいった。

「いい加減にしろよ、ミカ。ペガは元気な男子になっただけだろ。ってか、女子のくせにペガのチンポを観察して、お前の方が変態なんじゃねーの？」
「なっ！？　よりにもよってアンタに変態呼ばわりされるいわれはないわよ！」

うん。それはそうだよね。
何しろ､学校の外でもちんちん丸出しの全裸少年だもんなぁ。
その後も、ミカとテラは言い争い、それをハカセとぷーやんがいさめたりと色々騒がしくしていると、海藤先生が教室に入ってきた。

ハカセの『起立、気をつけ、礼』という号令で、今日も朝の学活が始まった。
海藤先生が言う。

「先週言った通り､今日の授業はオリエンテーリングだ｡美佳、秋、お前達は今のうちに配置につけ」

先生の言葉に、ミカとアキちゃんは『はい』とうなずいて教室から出て行った。
えっと……オリエンテーリングってなんだろう？　『先週言った』と言われても、僕はその時いなかったんだけど……
それが、テラの言う昨日の特別授業よりも、さらに気持ちが良いことなんだろうか？

僕が困った顔をしているのに気がついたのだろう。
海藤先生が説明を開始してくれた。

「天馬は初めてだから、改めて説明するぞ。オリエンテーリングとは、地図を頼りに村の中のチェックポイントを回るゲームみたいなものだ」

そう言いながら、海藤先生は僕らに村の地図を配ってくれた。
村の中に１０ヶ所赤い丸がついている。どうやらそれらがチェックポイントらしい。

「それぞれのチェックポイントでは試練にチャレンジしてもらう。１０ヶ所すべてのチャレンジに合格して、学校に帰ってくるのが目的だ」

ふむぅ。
試練か。
どんな内容なんだろう？
どうせ普通じゃないというか、エッチなことなんだろうなぁ。
海藤先生はさらに説明を続けた。

「例年通り、２チームに分かれてもらう。Ａチームが曾太郎と天馬、Ｂチームは真武と太志と悠宇だ」

この２チームで競争ってことらしい。

「なお、競技結果は、写真付で学校のホームページに掲載する」

この学校、ホームページなんてあったんだ。
スマホの電波も通じない田舎なのに。

「例年通り、勝ったチームのメンバーは服を着た写真を、負けたチームのメンバーは裸の写真を掲載するからな」

　え……？
　それって、負けたら裸んぼうの写真がホームページに載っちゃうってこと！？
　冗談じゃないよ！？
　もし東京の友達に見られたらどうするんだよ！

　僕が慌てている横で、テラが言った。

「えー、勝ったら服を着なくちゃいけないのか？　じゃあ負けようかなぁ」

　いや、それどういう判断！？

「心配するな。勝っても服を着たくなければ裸のままで大丈夫だ」
「よかったぁ」
「あと、勝ったら優勝賞品もあるからな。天馬、この村の思い出に優勝賞品を持ち帰れるよう頑張れ！」

　そんなことを言われても、僕はそれどころじゃなかった。
　おちんちん丸出しの写真がネットに掲載されるなんて、そんなの絶対に嫌だ。
　もしもそんなことになったら、僕はもう東京に帰れないよ！
　でも、いまさら参加したくありませんなんて言えるわけもない。

僕はテラに言った。

「テラ、絶対勝とうよ！」
「お、ペガ燃えてるな。オレに任せとけ」
「うん」

だが、チビテラはそんな僕らに反発する。

「違うよぉ～、今年はボクらが勝つも～んだ」

ちなみに、去年はハカセとチビテラ、テラとぷーやんというチーム分けで、テラとぷーやんのチームが勝ったらしい。
僕は気になっていたことを海藤先生に聞いた。

「ミカとアキちゃんはどこに行ったんですか？」

あの２人はオリエンテーリングに参加しないのだろうか？

「例年、女子は試練を与える側として参加してもらうことになっている」

ふーん。そうなんだ。
ハカセがちょっと心配そうに言った。

「ですが、ミカはともかくアキちゃんは１人でチェックポイントまで行けるでしょうか？」

たしかに１年生だもんね。

「それは心配ない。２人が向かったのは自分の家だ。校門まで秋のお母さんに迎えに来てもらっている。美佳は１人でも大丈夫だろう」

　どうやら、チェックポイントのうち２つは、ミカとアキちゃんの家らしい。

　それなら安心……なのかな？

「天馬、ルールは分かったか？」
「はい。村の地理はまだあんまり分からないですけど……」
「そこは曾太郎と一緒だから問題ないだろう。それでは全員、５分後に校庭に集合だ。トイレは済ませておけよ」
『はーい』

　昇降口にて。
　僕はみんなに聞いた。

「ね、ねぇ、オリエンテーリングってこのままの格好でやるの？」

『このままの格好』とは言うまでもなく『全裸』である。

　ハカセが答えた。

「もちろんですけど？」
「いや、だって学校の外に行くんだろ？　裸のままじゃ……」

「ペガくん。オリエンテーリングは授業の一環ですよ。当然、男子は裸教育に決まっているじゃないですか」

マジかぁ。
なんとなくそんな予感はしていたけどね。

「靴も履かないの？」

校庭ならともかく、村の中を走り回ったら何を踏んづけるか分からない。

「靴はＯＫですよ」

よかった。
僕らは下駄箱から自分の運動靴を取り出して身につけ、校庭に出た。

なんでだろう？
靴だけ履いた全裸って、何も履かない状態よりもさらにエッチく感じる。
昨日の帰宅時も靴だけだったけど、あの時はまだ絶倫薬の効果が少し残っていたのか、そこまで気にする余裕がなかったんだよね。

校庭にはすでに海藤先生がいて、僕らにチームごとに集まるよう指示した。

「スタートはＢチームからだ。低学年の悠宇がいるぶん、１０分のハンデを与える。Ｂチームが出発して１０分経ったらＡチ

ームがスタート。チェックポイントを回る順番は自由だ。試練に合格したら、この紙にはんこを押してもらうこと」

　海藤先生は紐付きの紙を、テラとハカセに渡した。
　首からかけられるようになっていて、１０個のはんこを押す場所がある。

「それと、熱中症にならないよう、各自に水筒を配る。中身は去年と同じだ」

　海藤先生は、首からかけられる紐がついた水筒を僕らに配った。
　スポーツドリンクでも入っているのかな？
　確かに今日もお外は暑いもんね。

「何か質問があるものはいるか？」

　誰も質問しないのを確認して、海藤先生が言った。

「それではオリエンテーリング、スタートだ！」

　まずはハカセたちＢチームがスタート。
　僕らＡチームは１０分間校庭で待機である。

　僕はテラに聞いた。

「１０分ってけっこうな時間だよね。大丈夫かな？」
「へーきへーき。むこうは運動が苦手なヤツばっかだから」

ハカセは勉強ばっかりで運動は苦手、ぷーやんも見た目通り。チビテラは何しろまだ２年生。

「ペガは運動得意か？」
「うん。一応東京ではサッカークラブに入ってるし」

補欠だけど、とこれは心の中で付け足した。

「いいなぁ。オレもサッカーやってみてー」
「やるなら、ちゃんとユニフォームを着ないとダメだよ」
「えー、そうなのか。じゃあいいや」

諦めるの、早っ！？

「それはそれとして、オレも運動は得意な方だし、１０分くらいハンデがあってもあいつらに負けはしないって」

本当に？
もしも負けたら、全裸写真がホームページに載っちゃうんだぞ。
テラはかまわないかもしれないけど、僕は絶対に嫌だ！

「そんな心配そうな顔をするなって。優勝賞品はオレ達のモノだから」
「賞品の心配なんてしていないよ！」
「え、じゃあ、何の心配をしているんだ？」
「それは……」

と、そこまで話したときだった。

海藤先生が言った。

「Ａチーム、あと１５秒でスタートだ！」

こうして、僕らＡチームもスタートを切ったのだった。
校門の外に出ると、またしてもスマホやカメラを構えたオジサン達がいた。
彼らは無遠慮に僕らを撮影しているようだ。
僕は慌ててておちんちんを隠した。

「ちょっ、やめて、撮らないでっ！」

もちろん、僕のそんな訴えは通用しない。
テラが僕に言う。

「ほっとけよ、ペガ。オリエンテーリングは撮影自由なんだから」
「そんなぁ……。昨日も撮影されたけど、本当にＳＮＳや動画サイトに投稿されたらどうするんだよ！？」

テラはキョトンとした表情を浮かべた。

「それって、何かマズいのか」
「マズいに決まってるだろ！　東京の友達に全裸でいるところを見られたらどうするんだよ！」
「いいじゃん。東京のヤツラにもペガの元気なところを見てもらえば」

だめだ、話が通じない。

テラは「そんなことよりも……」と撮影中のオジサン達にたずねた。

「先に出発した３人はどっちに向かった？」
「えーっと、あっちの方かなぁ」

オジサン達が指さしたのは、アキちゃんの家や僕のじいちゃんの家、それに珍歩寺のある方向だった。

「ふーん、じゃあペガ、オレ達は逆方向から回ろうぜ」
「うん。それはいいけど……」

オジサン達が撮影を続けたまま僕らに着いてきそうだ。

「ペガ。気にすんなよ。ここで立ち止まっていたら勝てねぇぜ」
「わかったよっ！」

僕はおちんちんを隠したまま村の中を走り始めた。

僕らが最初にやってきたチェックポイントは、村の一番東にある民家だった。
家主らしきおじいさんが、僕らを居間へ招き入れてくれた。『僕ら』というのは僕とテラだけじゃなくて、撮影に夢中になっているオジサン達もだ。

床に置かれていたのは……習字道具？
文鎮と縦長の半紙が５つずつだ。

でも、筆や硯はない。
代わりに置いてあるのは、墨汁がたっぷり入ったどんぶり？
これも５つある。

僕が頭の上にハテナマークを浮かべていると、おじいさんが言った。

「このチェックポイントで挑戦してもらうのは『おちんちん書道』だ」

おじいさんの説明はこうだ。
どんぶりの中の墨汁をおちんちんにつけて、半紙に自分の氏名をかくこと。
もちろん、あだ名じゃダメ。漢字で書く。

正直な僕の感想は……またアホな競技を考えるなぁというものだった。

「ペガ、オレも呆れるけど、ボーッとしてる場合じゃねーぜ」

そうだった。
こうしている間にもハカセたちも先に進んでいるんだった。
テラがどんぶりの中におちんちんをつっこむ。

「あっ。けっこう気持ちいいかも♡」

そんなことを言いながら、どんぶりからおちんちんを出したテラ。
だが、おちんちんがふにゃふにゃしていて、筆代わりに使う

には頼りない。

「やっべー、勃起させてから墨汁をつければ良かった！」

　そんなことを言いながら、テラは珍の一画目を書くべく、半紙の上に覆い被さった。
　ちょうど、肘立て伏せのような格好だ。

「やっべぇ、これけっこうキツいぜ」

　そう言いながら、テラは一画目の横棒を書いた。

「うっはぁ♡　なんか、床オナしてるみたいで気持ちいい♡　こんなんすぐ勃起しちまうぜ。ペガも早く書けよ」

　たしかにこのまま突っ立ていてもしょうがない。
　僕もどんぶりの中におちんちんをつっこもうとし……いや待てよ。
　さっきテラも言っていたとおり、先に勃起させた方が有利っぽい。

　僕はその場でオナニーを始めた。
　すると、カメラを構えたオジサン達がざわめいた。

「おお、テラくんがオナニーを始めたぞ」
「東京の友達に裸を見られたくないなんていいながら、カメラの前でオナニーするとは」
「本当はみんなにエッチなところを見てほしいんでしょう」
「なにしろ全裸教育やセックス教育を平気で受ける変態小僧で

すからなぁ」

　ううん、勝手なことを言っている。
　思わず逃げ出したくなるが、ハカセ達に負けるわけにはいかない！
　無視だ、無視！

　オナニーの結果、僕のおちんちんが硬く勃起した。
　僕は勃起したおちんちんを墨汁の中につけた。
　墨汁は生暖かくて……たしかにちょっと気持ちいいかも……って、僕は何を考えているんだよ！

　僕はペガと同じように、半紙におちんちんで文字を書き始めた。
　まずは『春風』の１画目～３画目、横棒３本一気に書いた。

　ううん、あんまり上手く書けなかった。
　平行じゃないし、ぐにゃっと曲がってもいる。
　もともと僕って習字苦手なんだよなぁ……

……それにしても、テラの言うとおりだった。
　半紙におちんちんをこすりつけるようにして書くと、おちんちんへの刺激が気持ちいい！
　テラは床オナっていってたけど、たぶん床でオナニーっていう意味だよね。

　そのテラは、珍という漢字を書き上げていた。
　お世辞にも上手い字とはいえないが、読めなくもないくらいだ。

こんな方法で書いた字にしてはファインプレーモノだ。。

1文字目を書き終えると、テラはいったん立ち上がって言った。
おそらく、腕や腰が限界だったんだろう。

「ふぅ、つかれた。それにしても、やっべぇ。本当に気持ちいい♡　マジで書いてる途中でイっちまいそうだった」

おじいさんが言う。

「精液を半紙に飛ばしたら不合格だ。もう一度書き直しだぞ」
「げ、マジかよ。ピンチじゃん」

本当に射精するつもりだったの！？
僕は『春』という字を書き終えて立ち上がった。
我ながら、読めるか読めないかギリギリの下手くそな字になってしまった。

「はっは、ペガの字へたくそだな」
「それはテラもだろ。こんなんで上手く書けるわけないじゃん」
「そりゃそうだ」

それから、僕らは再びおちんちんに墨汁をつけて、それぞれの二文字目の漢字を書きはいじめたのだった。

僕らが悪戦苦闘しながら『おちんちん書道』を終えたのは、

２０分後のことだった。
　テラもなんとか射精せずに書き終えたみたいだ。
　必死に頑張っていたから忘れていたが、もちろん『おちんちん書道』の様子はオジサン達に撮影され続けた。
　やだなぁ。本当に恥ずかしい。

　僕らの書いたそれぞれの氏名はめちゃくちゃ汚い字だったけど、なんとか合格だったらしい。

　テラが言う。

「じゃあ、次のチェックポイントに行こうぜ。結構時間食っちまった」
「うん」
「あ。その前にじいちゃん。はんこくれよ」

　そうだった。試練をクリアーしたらはんこをもらわないとね。
　だが、おじいちゃんが言った。

「まちなさい。おちんちんを真っ黒にしたまま行くつもりか？」

　確かに、僕とテラのおちんちんは墨汁で真っ黒だ。
　おじいちゃんは棚の上に置いてあったウェットティッシュを１枚取り出した。

「拭いてやるからこっちに来なさい。まずはペガくんからだ。はんこはその後で押してやろう」
「はい」

僕がおじいちゃんの方に行くと、おじいちゃんは僕を抱きかかえるように座った。
そして、僕の両足を掴んで、左右に広げた。
ちょうど、撮影中のオジサンたちに、僕のおちんちんを見せつけるようにだ。

「ちょ、何を……」
「動くんじゃない」

そんなことを言われても、こんな体勢を取られるなんて恥ずかしすぎる！
おじいちゃんはウェットティッシュで僕のおちんちんを拭き始めた。
そのおかげで、少なくとも右足は自由になったんだけど……やっぱり左足は押さえられたままだし……

……それに。

僕のおちんちんを拭くおじいちゃんの手の動きが、何かおかしかった。
確かに墨汁の汚れを拭いてくれているんだけど、まるでオナニーのような上下運動で。

「あぁぁん♡　おじいちゃん、だめぇ♡　そんなことしたら、あぁあん♡」

僕はそんなあえぎ声を上げてしまう。
撮影中のオジサン達が嬉しそうな声を出した。

「おお、ペガくん悶えていますなぁ」
「おじいさんのウェットティッシュオナニーがそんなに気持ちいいのかな？」
「この場合はオナニーとはいわんでしょう。手コキでしょうか」
「いずれにしても、早速おちんちんから我慢汁を垂らしていますよ」
「ところで、テラくんも見てください。ペガくんの気持ちよさそうな顔を見て、彼も我慢汁を垂らし始めましたぞ」
「本当だ！　お友達が気持ちよさそうなところを見て興奮してしまったんでしょうなぁ」
「本当に、淫乱変態小僧どもですな」

　僕のおちんちんは、おじいさんのウェットティッシュのなかでギンギンに勃起していた。

「だめ♡　それ以上やったら、本当に射精しちゃうからぁ！」
「心配するな。射精したらそれも拭いてやるから」

　やっぱり、おじいさんは僕を射精させようとしているんだ！
　その証拠に、墨汁はほとんど綺麗になったのに、僕のおちんちんをシコシコする手は止めない。
　僕の耳元で、おじいさんが言った。

「射精しないと終わらないぞ。『おちんちん書道』の本当の合格はこうして射精するまでだからな」

　無茶苦茶だぁ。
　あんなに頑張って文字を書いたのに！
　でも、こうなったら逃れられない。

だったら、とっとと射精するしかないのか。
でも、これがなかなか……

自分でやるオナニーやアキちゃんにしてもらう手コキと違って、おじいさんの手の動きはちょっと乱暴なんだよなぁ。
なかなか射精まで行き着かない。

僕はおじいちゃんに言った。

「自分でやるから……」
「何を自分でやるんだ？」
「自分でオナニーして射精するから放して」
「なんだ。儂の手コキじゃ不満なのか？」
「自分でやった方が早いもん」
「わかった。ならば、ゲストの皆さんの方を向いて、元気にオナニーしなさい」
「はい」

ゲストっていうのは、撮影しているオジサン達だよね？
僕はオジサン達の方を向いて、オナニーを始めた。
そのぼくを……僕のおちんちんをオジサン達がスマホやカメラで撮影する。
とてつもなく恥ずかしいことだったけど､やるしかなかった。

一方、おじいさんはテラにも言う。

「次はテラだ｡おちんちんを拭いてやるからこっちに来なさい」
「わかった」

テラもまた、おじいさんに両足を広げられる。
テラは特に抵抗しない。
むしろ……

「なあ、オジサン達、ペガだけじゃなくて、オレも撮影してくれよ！」

僕を助けるため……じゃないだろうな。
本気で撮影してほしいと思っているような声だった。
オジサン達はざわめく。

「むむむ、どちらを撮影すべきか」
「ペガくんの羞恥オナニーもいいが、テラくんの元気ちんちんも捨てがたい」
「ふむぅ、では私がペガくんを撮影しますから、あなたがテラくんを撮影してください。あとでデータを交換しましょう」
「おお、そうですな」
「わ、私もあとでテラくんのデータを頂けませんかな？」
「僕はペガくんの動画が欲しいです」

ううう。やっぱり写真だけじゃなくて、動画も撮られているんだ。
撮影されながらオナニーしちゃってるんだ。
もうすぐ、射精しちゃいそうだ。

なんて恥ずかしいことをしているんだろう。
でも、負けるわけにはいかない。
負けたら全裸姿がネットにアップされちゃうんだから。

だけどオジサン達が撮っている写真や動画だって、ネットにアップされない保証はないよね。
どちらにしても最悪すぎるけど……それでも今は頑張るしかない！

それから５分後。
僕はオナニーで、テラはおじいさんの手コキで、ほとんど同時に射精したのだった。

こうして、一つ目のチェックポイントはクリアーとなった。
カードにはんこを押してもらって、僕らは次のチェックポイントへ走り出した。

だけど。
それから僕らを待ち受けていたのは、もっともっと恥ずかしくてエッチな９個の試練だった。

４日目② まだまだ続くエッチなオリエンテーリング!10ml射精せよ!?

『おちんちん書道』の試練を終え、さらに射精までして、ようやく１つ目のチェックポイントをクリアーした。
　外に出てから、僕は地図を持つテラに聞いた。

「次のチェックポイントはどっち？」
「えーっと、あっちの方だな。ってか、ハカセんの家じゃん」

　どうやらチェックポイントのほとんどは村民の家らしい。
　というか、クラスメートの家が大半のようだ。

「ってわけで、また走るぞ」
「うん……あ、ちょっと待って」
「どうした？」
「ちょっと喉が渇いちゃった」

　僕はそう言って、水筒の蓋を取った。

「えー、もう飲むのかよ？」
「だって、疲れたんだもん」

『おちんちん書道』は結構体力を使ったし、オナニー射精も同じくだ。
　それに家の中はともかく、外は暑い。
　カンカン照りのお日様が憎いくらいに、全裸の肌を焼く。
　もちろん、もらった水筒はそんなに大きくないし、飲み物は

貴重かもしれないけど。

「わかったよ。オレも飲む。でも歩きながらな」
「うん」

　水筒の中身は透明な液体だった。
　僕は少し飲んだ。
　って？
　この水、お薬みたいに苦いよ！？

「何このお水。腐ってない？」
「水って腐るのか？」

　テラもお水を飲んで顔をしかめる。

「確かに苦いな。ま、毎年のことだけど」
「はぁ？　それどういう意味だよ」

　などと言っていたときだ。
　僕の体が、なんとなく熱くなってきた。
　いや、風邪をひいたとかじゃなくて。
　体中からエネルギーがあふれてきたというか。

　っていうか、この感覚は昨日味わったばかりだ。
　絶倫薬を飲まされた、あの時と同じ……

……まさか！？

　僕は水筒をマジマジと見た。

「ねえ、テラ、これって？」
「だから言っただろ、『もう飲むのか？』って。この先の試練でも元気に勃起や射精しなくちゃいけないかもしれないのに」

　そういう、テラのおちんちんは、さっき射精したばかりだというのにムクムクと勃起していた。
　いや、テラだけじゃない。
　写真撮影をしていたオジサン達が笑いながらざわめく。

「あれあれ～。テラくんもペガくんも、勃起しちゃってますよ」
「さっきあれだけ射精したばかりなのに、さすがこの村は元気小僧ばかりですな」
「ペガくんはカメラの前でオナニーして、射精してまだ足りないのですなぁ」
「テラくんなんて、ちょっとだけですが我慢汁を垂らしていますよ！」
「いやぁ、眼福眼福」

　オジサン達が言うとおり、テラだけでなく僕のおちんちんも勃起していた。
　やっぱり、このお水！？

「ねえ、このお水って……」
「そういうこと。試練の大半は勃起や射精しなくちゃいけないからな。性欲回復するための『スペシャルドリンク』だよ」

　何が『スペシャルドリンク』だよ！　絶倫薬を溶かした水じゃないかっ！

くそ！　だまされた！
海藤先生が僕らに親切だけでドリンクをくれるわけなかったんだ！

「さ、ペガ。喉も潤ったし、走るぞ」
「あーもう、分かったよ！」

僕らは２つめのチェックポイントに向かって走ったのだった。
その様子をオジサン達が撮影しているけど、後ろ姿以外は撮影できていないだろう。
少なくとも今は。

２番目のチェックポイントで待っていたのはハカセのお父さんだった。
眼鏡をかけていて、真面目そうな顔をしている。

「いらっしゃい、待っていましたよ。テラくん、ペガくん。いつも息子がお世話になっています」

ハカセのお父さんらしく、僕ら相手にも丁寧語でしゃべる人だった。
僕は軽く会釈した。

「はじめまして」
「昨日、会いましたけど」
「あ、そうでしたね」

確かに学芸会のあと、顔は見た。でも挨拶はしていなかったからなぁ。
テラがハカセのお父さんをせかした。

「そんなことより、おっちゃん。早く試練の内容を教えてくれよ」
「わかりました。早速ですが試練を発表しましょう。ここでの試練は『合計１０ミリリットル射精せよ』です」

そう言ってハカセのお父さんが取り出したのは、理科の実験でおなじみのメスシリンダーだった。

「射精の方法は自由です。オナニーでもフェラでもアナルセックスでも好きにしてください。ただし、こぼした精液はカウントしないので注意してください」

テラがあきれたように言う。

「そんなのオナニー一択じゃん」

そりゃそうだ。フェラで射精したら口の中に精液が入っちゃうし、アナルセックスなんて論外だろう。
僕は念のためルールを確認した。

「2人でこのメスシリンダーの10の目盛りまで精液を出せばいいんですか？」
「その通りです」

なるほど。
テラが言う。

「よっしゃぁ。ペガ、早速オナろうぜ！」

テラはそういって、オナニーを始めた。
絶倫薬の効果もあって、あっという間に射精直前まで言った様子だ。

しょうがないか。
テラだけに任せておくわけにもいかない。
撮影しているオジサン達は気になるけど、僕もオナニーするしかない。

僕はシコシコとオナニーを始めた。
そんな僕らのオナニーを見ているオジサン達の声が聞こえてくる。

「２人ともさっき射精したばかりなのに、あんなに気持ちよさそうにオナニーして」
「お猿さんみたいですな」
「いやー、それはお猿さんに失礼でしょう。猿だってあんなにいつもいつも発情していませんって」
「たしかに」

テラがあっという間に絶頂を迎える。

「あぁぁん♡　もう出るっ！」

pixiv&クリエイター支援サイトのご案内

SUN_TAIのクリエイター支援サイトでは、
最新小説や**限定小説**を読むことができます。
ご興味がある方は下のQRコードかリンクよりどうぞ！

https://lit.link/suntai

※上記リンクはCI-en,ファンティア、ＦＡＮＢＯＸ、ｐｉｘｉｖなどへのリンク集です。
※CI-en,ファンティア、ＦＡＮＢＯＸで読める内容は同じです。